

校長だより

第46回卒業証書授与式を行いました

2月29日(木)に第46回卒業証書授与式を行いました。

卒業生に卒業証書を授与しました。その後、校長式辞を述べました。式辞では、「先の見通せない世界をどう生きるか」の問いを卒業生に投げかけました。下に式辞の全文を掲載します。

答辞では卒業生代表が、コロナ禍の不安の中で入学した自分たちを支えてくれた保護者の方々や教職員への感謝とともに、3年間をともに過ごした仲間たちとの絆の大切さと仲間への感謝の言葉を述べてくれました。

卒業生は、式後にRADWIMPSの「正解」を合唱し、卒業生それぞれの「明日からの日々を…」と思い描きながら、すがすがしい表情で伊川谷高校を巣立っていきました。



多くの祝電、祝詞をいただきました

【卒業式での校長式辞】

冬の寒さもようやく和らぎ、春の息吹を感じさせる今日の日、PTA会長様をはじめ、ご来賓の方々にお越しいただき、第46回卒業証書授与式を行えますことを大変うれしく感じております。46回生の皆さん、保護者の皆様方、ご卒業おめでとうございます。

卒業生の皆さんの高校生活は、コロナ禍の真只中でのスタートとなりました。目に見えないウイルスに社会全体が翻弄され、マスク生活が常態化しました。高校で新たに会った人たちと話したり、食事を一緒にとることなど、様々なことに制限を受け、友人をつくったり、仲間と高め合ったりすることさえ難しい日々が続きました。

そのような中であって、皆さんは本校の校訓である「自主・協同」、つまり、自分の行動に責任を持ちつつ、友情をはぐくみ、互いに協力し、支え合いながら、授業、学校行事、部活動に励み、たくさんの成果をあげ、伊川谷高校の歴史に新たなページを加えてくれました。

しかし一方で海外に目を移せば、ロシアとウクライナとの戦争、さらには中東パレスティナでの戦争など、争いが絶えません。国内を見れば、新年1月1日に発生した能登半島地震では、災害がいつ、どこで起きてもおかしくないことを思い知らされました。少子化、人口減少の波は私たちの足元にも忍び寄り、それらへの対策の一環として、母校、伊川谷高校は発展的統合の対象校となり、3年後にこの地での幕を閉じることとなります。

先の見通せない世界の住人である私たちは、次の一步をどこに、どう踏み出せばいいのか、「どう生きるか」が問われています。

「君たちはどう生きるか」、昨年夏から公開されている宮崎駿監督の映画の影響もあり、この言葉を色々なところで耳にするようになりました。この映画のタイトルは、80年以上前に出版された吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」という本の題名からとられています。この本は、時代を超えて読み継がれてきました。もしかしたら皆さんの中にもこの本を読んだことがある人がいるかもしれません。

卒業生の皆さんに、著者の吉野源三郎がこの作品に込めた願いをお話したいと思います。吉野源三郎の願いとは、「地動説」の考え方を大切にして欲しい、ということです。「天動説」、つまり自分たちの住む地球が宇宙の中心であるという考えにかじりつくことを止めよう、言い換えれば自分を中心に物事を考える状態から抜け出そう。そして「地動説」の立場で他の人や社会全体のことを考え、それらとともに生かされている自分の役割を考えて欲しいと訴えています。

「君たちはどう生きるか」の主人公、潤一少年は、コペル君と呼ばれています。自分中心の考え方から脱しようとする潤一少年に感動したおじさんが、天文学者コペルニクスに例えて名付けたニックネームです。コペルニクスは、星の動きを詳しく観察した結果、それまで常識

だった、地球を中心に宇宙が回っているという天動説では天体の動きの説明がつかないとして、地球は多くの星の一つとして太陽のまわりをまわっているという地動説を唱えます。やがてコペルニクスの唱えた地動説が主流になり、科学は大きく進歩しました。

自分だけよければよいとする自分中心の考え、いわば天動説の考えを持つ人がたくさんいる世界だと争いは絶えません。

卒業生の皆さん、あなた方も地動説、つまり社会全体のことや他人の幸せに思いを巡らせ、その上に自分の夢や幸せを重ねる、そんな視点を持って欲しいと思います。

「君たちはどう生きるか」は、日中戦争がはじまった 1937 年に出版されました。当時の日本では自国の利益を守るため、生意気な中国人を懲らしめなければならない、という考えが支配的でした。そうした中で戦争に反対する意見を表明することは、出版差し止めや自分や仲間が弾圧される危険と隣り合わせでした。しかしコペルニクスが天動説の支持者からの激しい反発を覚悟の上で地動説発表を決意したように、戦争を食い止めたいと考えた吉野源三郎は、その願いをコペル君に託します。コペル君はノートに「僕はすべての人がたがいによい友だちであるような、そういう世の中が来なければいけないと思います」と書きます。

吉野源三郎の願いもむなしく、その後日本は戦争への道を進んでいきました。一方で吉野源三郎は、ジャーナリストとして戦中、戦後を通して日本社会に反戦と民主主義の考えを根付かせるために力を尽くしました。

伊川谷高校を巣立ち、先の見通せない世界に踏み出そうとする卒業生の皆さん、吉野源三郎が願った、自分とともに他人や社会全体の幸福を考える視点を持ってください。そしてぶれることなく信じる道を進む 21 世紀のコペルニクスを目指してください。

卒業生のみなさんが、「君たちはどう生きるか」、の問いに向き合い、信じる未来の実現に向けて歩み続けることを祈念して、式辞といたします。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます